

聖書：ローマ 14：1～12

説教題：神がその人を受け入れて

日時：2016年7月24日（朝拝）

今日の14章1節から新しい区分に入ります。ローマ書は1～11章までの「教理篇」と12章以降の「実践篇」とに分かれますが、今日の章は12章13章と雰囲気が違うとお感じになるのではないのでしょうか。12章と13章はどちらかと言えば一般的な勧告でした。それに対して今日の箇所はローマの教会の特殊な事情を取り扱っているように見えます。それは教会の一致の問題です。

1節から、ローマの教会には信仰の弱い人とその反対の強い人との間に、ある種の対立と争いがあったことが分かります。具体的に二つのことが上げられています。一つは食べ物に関することです。2節を見ると、一方には「何でも食べて良いと信じている人」があり、もう一方には「野菜より他には食べない」という人たちがいた。この「野菜だけを食べる」というのは、21節に出てきますように「肉を食べない」ということです。ある人たちは異邦人の市場に出回る肉は「偶像にささげた肉」である可能性が高いため、これを食することは自分を汚すと考えて避けた。あるいは旧約聖書の食事規定にかなわないものは食べないという立場を取った。これに対してもう一方の人たちは、そのようにこだわる必要はないと考えました。すべてのものは神によって造られたのであり、それ自体で汚れているものはない。感謝して受ける時、捨てるべきものは一つもないと。

もう一つは5節にある「日」の問題です。ある人はある特定の日を他の日に比べて大事だと考えました。この「ある日」とは、ユダヤ人の祭りの日あるいは旧約時代のまま土曜日を安息日として守ることなどが考えられます。一方である人は、今や旧約時代のカレンダーには縛られる必要がないと考えた。様々な儀式はやがて来られるキリストを指し示していたのだから、そのキリストが来られた以上、以前の生活をそのまま続けることは御心にならなっていないと。

果たしてこの二つの内、どちらが弱い人の立場なのでしょう。2節から分かりますように、それは野菜しか食べない人です。どういう意味でこれらの人々は弱いのでしょうか。それはこの人たちのキリストへの信仰が弱いという意味ではありません。そうではなく、キリストが来られたことの意義を現実の生活に適用することにおいて洞察が十

分でないということです。キリストの来臨の光に照らしてすべてを考えることにおいて弱さを持っている人々のことです。パウロがどちらの立場であったかは 14 節から分かります。彼はそこで「主イエスにあって、私が知り、また確信していることは、それ自体で汚れているものは何一つないということです。」と語っています。つまり彼は「何でも食べて良いと信じている人」の立場にいます。しかしそこまで達していない人々がいる。それは誰でしょう。それは主にユダヤ人のクリスチャンたちであると思われます。彼らは長い間、律法の下で生活して来たため、キリストを信じてはいても洞察が追いつかず、かつての生活のあり方にとどまっていた。また異邦人クリスチャンの中にも、先輩格のユダヤ人の影響を受けて肉を食べず、特定の日を旧約の規定通りに守っていた人々もいたでしょう。おそらく最初の 1 節で「あなたがたは信仰の弱い人を受け入れなさい。」と全体的に語られていることを考えると、「信仰の弱い」人の方が少数者であったと考えられます。その少数者を他の大多数の者が「弱い」と見て軽蔑していた。一方で、食べない人たちは食べる人たちを見て、規則を守らないいい加減な人たちとさばっていた。こんな調子では当然、教会の平和は乱されます。パウロはまだローマを訪れていませんが、このニュースは受け取っていたのでしょう。それで福音を信じ、神に応答したいと願うクリスチャンはどのように振る舞うべきかについてここで語っているのです。

さて 1 節に「あなたがたは信仰の弱い人を受け入れなさい。その意見をさばいてはいけません。」とあります。パウロは決して何でも受け入れなさいと語る人物ではありません。福音の真理に関わることなら、彼は断固として戦った人です。ですからここで問題になっている事柄はキリスト教信仰に本質的なものでないことは明らかです。その場合は相手を受け入れなさい、主にある兄弟姉妹として親しい交わりの内に歩みなさいと彼は言います。その理由が 3 節にあります。「神がその人を受け入れてくださったからです。」 私たちは自分の考えで相手を受け入れるか、受け入れないかを決めようと思いますが、教会の交わりにおいて決定的に大事なものは神の判断です。その神が受け入れている人を私たちが受け入れないということはどういうことでしょうか。4 節：「あなたはいったいだれなので、他人のしもべをさばくのですか。しもべが立つのも倒れるのも、その主人の心次第です。このしもべは立つのです。なぜなら、主には、彼を立たせることができるからです。」 主人である神がその人を受け入れていると言っているのに、私たちが「いや、受け入れない」という態度を取るのには主に対する侮辱です。たとえ未熟な点が相手に多々見受けられても、神はその人を愛し、ご自身のしもべとして慈しん

でおられる。とするなら私たちはこの神の判断を大切に考えて、相手を受け入れ、親しく交わる歩みへ進むべきではないでしょうか。そのことによって神への感謝を現わすべきではないでしょうか。

パウロはもう一つの理由を6節以降で語っています。6節：「日を守る人は、主のために守っています。食べる人は、主のために食べています。なぜなら、神に感謝しているからです。食べない人も、主のために食べないのであって、神に感謝しているのです。」ここにその人がそうする動機が語られています。なぜある人々は特定の日を守ることにこだわるのか。それはその人にとって、それが主を尊ぶ方法だからです。食べることも同じです。ある人は何でも感謝して食べるのが主の御心にかなうことだと考えるので、そうします。ある人はあるものを食べないことによって主に感謝を表せると思うので、そうします。クリスチャンにとっての主はイエス・キリストだけです。7～9節に次のように言われています。私たちは誰ひとりとして自分のために生き、また死ぬ者もない。生きるにしても、死ぬにしても、私たちは主のものである。なぜなら主は私たちのために死んで、よみがえってくださった方だから。主は尊い代価を払って私たちを買い取って下さった方だから。だから食べるにも飲むにも、何をするにもただ主の栄光を現すためにする。これがクリスチャンの基本原理です。そういう動機によって一人一人が主の前に判断し、自分の取るべき道を決めている。私たちはそのことを良く考慮すべきであるということです。

私たちは誰かと自分の意見が違うと、一瞬緊張します。そして以前の私たちは、もうあの人とは一緒にやれない、あの人とは合わないと考えて、おさらばした。しかし私だけがクリスチャンなのではなく、相手もクリスチャンです。そしてクリスチャンはみな神への愛を持っています。ですから相手が私とは異なる意見を強く主張するとしても、それぞれは神への愛によってそう考えています。私たちはまずそのように相手の判断を尊重することが大切ではないでしょうか。もちろんこのことは、お互いはお互いの意見について何も言うてはならないということではありません。もしそうだとしたらパウロがこの手紙でこのように勧めていること自体、矛盾していることになります。パウロが禁じているのはディスカッションではなく、お互いの意見の違いによって交わらなくなる事、相手を受け入れなくなる事です。そうではなく、たとえ相手と自分の意見が違っても、相手もまた「主のために」と考えて、その立場を取っていることを私たちはまず慮るべきなのです。

以上のことは受け止めつつも、やはり一つの疑問が私たちに残るでしょう。それは、では正解はないのかということです。ある人は「主のために」と考えて何でも食べる立場を取り、他の人も「主のために」と考えて、あるものは食べないという立場を取る。このどちらも正しいというのはおかしいことです。肉を食べて良いということと、それを食べてはならないという立場は対立します。なのになぜパウロはこれについて白黒つけないのか。パウロは牧会的配慮のゆえに、あるいはもっと大事なことを強調するために、議論の前面に出してはいませんが、事柄それ自体としてはより正しい立場というものはあるのです。それは先にも触れましたが、14節に出て来ますように、何でも食べて良いという立場です。ではなぜ彼はそのことを前面に出さず、むしろそれぞれで良いという言い方をしたのでしょうか。それは、人の成長には度合いがあるからということでしょう。裸の真理としては14節がより聖書的な立場であることははっきりしていますが、今すぐにその真理を受け止められない人もいます。ユダヤ人クリスチャンになったつもりで考えてみて頂くと分かりやすい。その人は小さい時から律法の教育のもとで養われて来ました。ある特定の日に特別な畏敬の念を抱いて来ましたし、ある食べ物はずっと遠ざけてきました。それらが全部キリストを指し示していたことを理解して、それにとらわれなくなるのが一番良いのですが、そこまで行かない人もいます。キリストは信じているが、今まで守って来た日は同じように守らなければならないと感じている。食べて来なかったものを食べることは罪を犯すことのように感じる。まさにここが彼らの弱い点なのです。しかしだからと言って、このような人を非難して無理に正解を押し付けたらどうでしょうか。その人は知識や確信がまだ付いていきませんから、それは罪を犯すことだと感じます。そしてそう思っている状態でそれをする・させることは最悪のことなのです。悪いことだと感じながらそれをするのは悪いことです。そのような人たちにとっては、なお日を守り、野菜だけを食すること以外に、一体どのようにして清い良心を持って主に従う方法があるでしょうか！神はそのような彼らの状態を思いやって下さるので、その人がさらに成長するまでの間、今のままでよしとして下さるのです。もう一度申し上げますが、今日見てきた二つの立場はどちらも等しく正しいとパウロは言っているわけではありません。片方がより正しいのです。しかし神は「両方」を受け入れておられる。なぜならある人にとってはその限られた知識、まだ十分に成長していない知識においては、それ以上のことは無理だからです。その段階ではそれが精一杯である。しかしそういう人をも神は受け入れ、ご自身のものとし、今はまだそれを続けていて良いと言っている。私たちはこのように仰っている神の姿を仰

ぐべきではないでしょうか。神は私たちの成長に合わせて導いて下さるのです。不十分だからと言って捨てずに、私たちの弱さを慮り、ご自身に対する愛だけを受け取って、後により良く成長するのを待って養って下さるのです。

そのことを思う時、これは私たち皆に当てはまることだと分かります。私たちは不完全なところだらけの人間です。迷信にとらわれてきたところもたくさんあります。しかし神は私のレベルに合わせて導いて下さった。一度に高い要求をされたら、いっぺんで全部つぶれてしまう。しかし今はそのレベルで良い。神はそうして私たちを育てて来て下さったのではないのでしょうか。そしてそうしてくれたのは神ばかりではないでしょう。この神に導かれた多くの信仰の先輩たちも私たちにそうしてくれたのではないのでしょうか。私たちは今でもそうですが、かつても足りないところはたくさんありました。信仰の知識において全く欠けており、それなのに浅はかな持論を展開したこともありました。それをいちいち取り上げて反駁されたら、私たちはどうの昔につぶれていたでしょう。しかし多くの先輩たちは、私たちの足りないところを温かく見守り、忍耐し、陰で祈り、支えて下さいました。罪を犯すようなことについては厳しく何かを語ってくれても、本質的でないことについてはいちいち議論せず、私たちの成長の度合いに合わせて、未熟な私のあり方をその時はそれで良しとしてくれた。それによって私たちはここまで導かれて来たのではないのでしょうか。なのにその私たちが今、他のクリスチャンとちょっと意見が合わないからと言って、あるいはその考えは不十分だと言って、いちいち攻撃し、論駁し、そうして相手をつぶしてしまっても良いものでしょうか。神が不十分な私をそのまま受け入れ、ここまで導いて下さったように、また信仰の先輩たちがそのように私たちに接してくれたように、私たちも他のクリスチャンをそのまま、愛と忍耐と祈りを持って、兄弟姉妹として受け入れ、尊敬し、接して行くべきではないでしょうか。

もしそうしないと言うなら、最後 10～12 節にあるように、やがて神のさばきの前に立つ日のことを思い起こさなければなりません。11 節にありますように、私たちは相手の人と一緒に、その方の前にひざまずく者です。なのにそこから立ち上がって自ら裁判長の席に付くなら、それはあまりに非常識な姿と言わなければなりません。私たちは兄弟をさばく時、実にそのことをしているのです。神の椅子に座って勝手なことをしている。その罪について私たちは最後の日に申し開きをしなければなりません。神はそのことを必ず問うと言っておられます。そのことを真剣に思うなら、私たちはやがての日に

むしろ神から賞賛されるように、今の生き方を変えて行くべきではないでしょうか。その方法とは神が受け入れているすべてのクリスチャンを主にある兄弟姉妹、神の家族、同じ天国の市民として受け入れ、またそのように心を合わせて親しく共に歩むことです。

パウロはこの後もこのテーマについて大切な真理を語って行きます。私たちは引き続き、その彼の言葉に聞いて行きたい。私たちがある人のことをどう思おうと、神はその人を受け入れておられます。そして神がそのようなあわれみの神であるので、私自身、今日このようにここに立たせて頂いています。私たちはその神の姿を仰いで、そのあわれみの前にひれ伏し、心からの感謝をささげたいと思います。そして私たちがまた神に倣って、神が大切にし、受け入れている兄弟姉妹を受け入れ、神が導いて下さる素晴らしい一致の祝福、神の栄光がそこに現われる歩みへ進んでまいりたいと思います。